

燻し否定は現物観察主義の調査の結果

—皮革という素材の自在な利用に驚嘆—

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

「白い部分の凹み」は食害の可能性

永瀬氏の一連の考察のなかで私が一番気にしている部分は、「白い文様部分の凹み」である。つまり、調査報告書に記述した「凹み」を引用しながらその一方では、筆者が述べている革の白い部分の凹みの原因として言及している「虫食い」の可能性については、一言も触れられていない点である。その食害の現状はガラス越しにはまず見えないであろう。斜光を当てて近くでこそ初めて見えるものであり、指先の感触でその程度や大きさを感じることができるのである。報告書の数箇所において、革の着色していない部分での「食害」による損傷を紹介している。化学的分析でもなく、指先の感触、肉眼や実体顕微鏡等による非破壊調査においては、かかる「食害の可能性」の指摘は重要であると考えている。ここでいう着色とは植物染料とか燻しによる彩色のことである。

多くの皮革に食害を観察

昆虫の幼虫によると考えられる食害は、鹿革だけでなく、牛革やそのほかの革でも至るところで観察されている（詳細は後日に述べる）。漆に起因すると見られる茶褐色に変色した部分でも甚大な被害を受けているのである。未着色の鹿革では極端な場合、その凹みは部分的・集中的に形成されているものすら観察されている。指先を触

れながら眼前で観察した実感からすると、凹みの不均一性からも文様型の痕跡とは考えにくいものであった。

いぶ燻し否定は現物観察主義の結果

同氏は鞍褥くらじきに限って考察しているのだが、筆者は屨脊なめについても、鞍褥と同様のことを観察し、その内容は報告書に示したとおりである。屨脊にも着色の鹿革が使われている。全体的には着色部分も白抜き部分も平坦ではあるが、白い部分は食害を受けているし、部分によっては平坦であったり凹凸状であったり、かなり変化に富んでいて、形状は一様ではない。そして、それぞれの文様の縁周りにおける不自然な着色や色のずれをみても、どうしても燻しの技法とは考えられなかった。つまり、鞍褥の着色は燻しではなく、染料によるものと判断したのである。永瀬氏が私どもの「食害」の記述を恐らく承知しながらも「食害」に触れなかったのは、当該品を正倉院展の薄暗いガラス越しに見ることによって「食害」を実感されなかったことによるものではないかと、筆者は推察している。筆者らのチームが宝物調査に当たって先ず心がけたことは、文献や史料による考察ではなくて、現物観察による調査と判断であったということをあえて強調しておきたいのである。

その他の皮革製品



十合鞘御刀子 鞘

出所『調査報告書』より（以下同じ）

イメージ図



上から見た図

この中心部分で、その近辺の鞘の上部を引き連れて上方に伸ばし、穴を開け、吊り下げられるような仕組みになっている。

十合鞘御刀子〈じゅうごうざやのおんとうす〉

資料：鞘長24.5 鞘は黒漆塗 金具は金銅

毎日新聞社刊『正倉院寶物』（1995～97）（本書を以下では『資料』と称する）

によると「刀子は、実用のほか、帯から吊るす佩飾品の用も兼ねた。緑牙撥 鏤 把鞘・斑犀把 白牙鞘の御刀子二口は斑犀偃鼠皮御帯に、六本の小刀と錯・鑽・鉦をセットにした十合鞘御刀子は斑貝鞋 鞆 御帯に、それぞれ繋がれていたものである。」と紹介されている。

調査の当初、本品は調査の対象には含まれていなかった。材質が何か、判然としなかったからである。しかし、皮革を材料として成型されたものではないかと推測されていることから、観察に供されたのである。調査団にとっては貴重な経験となった。

[調査の結果]

刀子を収容できる筒を十本集めた形になっていて、造形的にも面白い形をなしている。資料には皮革とは明示されていないが、皮革製と称されている宝物である。表面の漆の欠けた部分では皮の組織の確認はできなかった。筒の入り口部及び筒の胴には他の材質とは異なる、皮革特有の凹凸感がある。また、手にした重量感からも

皮革を使ったと考える方が適切という軽さであった。しかし、下地の露出部がなく、皮革と判定できなかった。なお、筒の内部についてはボアスコープで観察したが、ざらつき状態が観察されるものの観察方法に限界があり、皮質を示す様子は認められなかった。もう少し精度の良い装置が必要であった。

斑犀把漆鞘銀漆荘刀子〈はんさいのつかうるしのさやぎんうるしかざりのとう〉第2号帯執〈おびとり〉

資料：全長37.8 把長16.4 鞘長27.5 身長15.4 茎長4.5 把は犀角 鞘は木製黒漆塗 把口は銀 金具は銀製漆塗 付 紫皮帯執

[調査の結果]

刀子は中国製と称されている。黒っぽい紫革で色は良く、厚さは2.4～2.6mmだが、先端の薄いところは1.1mm、全体的に柔らかくて、繊維は比較的粗い。革の中ほどの特に厚い部分の芯は白いが、全体としては紫の染料は貫通し、かつ褪色が少ないという他の紫革にはない特徴が見られることから、染色技法が他の着色革（紫革）とは明らかに異なると思われる。線維の振れも観察されることから鹿の燻し紫革と見られる。表面には皺らしきものもあり、線維の粗さから大判鹿革であろう。断面では線維の絡みが明瞭である。

調査した宝物の中で、これほど芯通しした紫染の鹿革は初めてである。表面の一部に線維が固まったような団子表面状があるもの、斜光で見ると表面の毛羽に輝きすら認められる。線維は鹿としてはかなり粗い。中国製とも伝えられるが、染の特徴からその可能性は十分考えられる。



筆 第7号 左方が帽

筆 第7号 帽

資料：管長20.3 管径1.9 管はマダケ属の斑竹（豹文竹）象牙彫飾 毫は僅存 帽はハチク 樺・白革巻

[調査の結果]

帽：帽とは、動物毛で作られた筆の穂の部分を保護するための被せであって、細い竹材を組立てたものである。管に接する部分、即ち帽の入り口の縁取りに革が使われている。帽の竹櫛の先端部に革を被せるように取り付け、糸で固定している。細工の細かさから見て、革を円形に切り取り、糊で竹櫛の先につけ、糸で補強したものであると思われる。革は、一見鹿革であるが、疑問が残る。顕微鏡写真では線維のほぐれを見せているものの、この薄さでは革としての形状を維持できるとは考えられないこと、及び、全体的な膠着状態から見て鹿革とは言い難く、小動物の革と推測される。

筆毛：毛種等については、判断は差し控えたい。

紫革裁文

『資料』によれば、その全体像は「真綿を白の平絹で包み、その上に茶褐色の平絹を重ね、表面に褐色羅、裏面に目交縷縷綾を張って、表面全体に刺繍を施している。両端と中間には忍冬文の紫皮裁文を縫い付け、周縁には矢羽根文の丸打組紐を二重に綴じつけ、両長側に珠玉の垂飾を縫い付けている。非常に装飾性に富んでおり、正倉院に伝わる染織の帯の中では最も豪華なものといえよう。なお、今では垂飾は片長側にしかなく、他方には縫い付けていた痕跡

しか残っていない。」

追補 注：報告書及び『資料』等には「紫皮裁文…」とされているが、染革であることから、ここに示す「紫革裁革…」の表示が正しい。



紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帯残欠

紫革裁文珠玉飾刺繡羅帯（ししゅうらのおび） 残欠端飾り

資料：長85 幅7 茶縷 [ちゃあしぎぬ] 地に茶羅貼 刺繡 忍冬[にんどう・すいかずら：蔓性植物] 形裁文は紫染革縁は組紐 垂飾はガラス・真珠・水晶・銅製鍍金尊金具

[調査の結果]

上部には鹿の紫革がある。断面を見ると芯は白く、両面染めである。紙繕いで浮かせられるほどの柔軟性がある。拡大鏡での観察では表面にも白い革の線維が散見されるので、塗り染めであろう。

薄い皮において型抜きとか縁縫いが可能であるのかとの疑問が出た。普通には和紙を当てて行うという。本品の細工が極めて微細であるので、金型による型抜きではないと考えざるを得ない。型抜きでないなら、鋭い刃先で丹念に押し切りしたのではないだろうか。別の残欠では虫食い跡が見られるが、針穴のようにも見える。全てに金糸の細かい縁縫いが見られる。

断片大：表側になっている面は裏側の面よりも血管跡が認められるので、使い方としては不自然である。裏になっている面が本来なら表側になるはずと思われる。

断片小：表になっている面は本来の表と見てよい外観をしている。虫食い跡や針穴が見られる。

いずれにしても、糊跡も和紙の跡も見ら

れない。水で濡らしたような跡も認められない。処々に損傷が見られて断片化しているが、革の薄さ、しなやかさ、裁文の細かさと鋭さなどを考えるとき、どのようにして細工をしたのか見当のつかない、実に見事な裁文である。

屏風骨の皮革

『資料』には「屏風骨とは、奈良時代以来伝来の屏風が破損し、ほとんど骨ばかりになったものを整理したもの。明治時代には五十九束三百三十九扇（枚）に整理されている。大正三年（1914）の古裂整理事業の開始とともに、古裂の保存整理のためにこれが利用され、古裂貼付されたもの三百二十二扇あり、現在四疊十七扇分だけが辛うじて奈良時代の面影を伝えている。」そして、図版には第6、16、57、58号が掲載されているが、調査したのはその第16号に付属する銭形及び帖角である。これらの小さな部品は革製で、屏風を重ね合わせたときに擦れないよう、隙間を作るように工夫された部品、即ち、クッションである。このような当て物は、この当時から工夫されていたことが分かる。

屏風骨〈びょうぶのほね〉第16号

資料：長149.3 幅56.0 六扇重ね厚10.5杉

麻布・紙貼 本地の夾纈^{きょうげちあしぎぬ}僅存 縁は
碧地^{へきじ}夾纈^{きょうげちあしぎぬ} 帖木は杉 仮斑竹 釘
は銅・鉄製黒漆塗 帖角・銭形は革
製 接扇は緋纈 背面は麻布・碧纈
貼 縁は白地夾纈綾

[調査の結果]

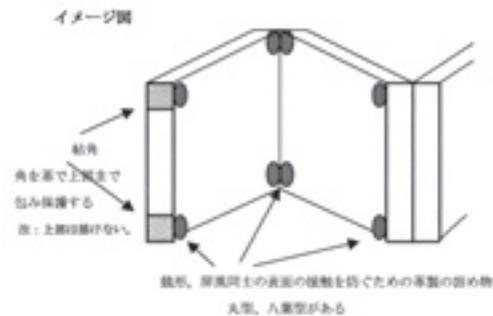
銭形：色目としては淡黄色ものと紫色の二つがあり、さらに、形としては丸型と八葉型とがあって、中心部には固定するための穴が開けられている。淡黄色の革は比較的薄くて厚さは1～2mm、柔らか

く、鹿革と見られる。紫革は中層部が白っぽくて硬く、厚さは2.5～3mmもあり、鹿革以外の皮革と考えられる。虫食い穴も多い。表面はかなり汚れているようである。

他に、白色のものがあり、穴は開いていない。



銭形・帖角（函装27）



帖角：イメージ図上のような作りのものの厚さは0.7～1mmである。断面が茶色になっていて硬いものもあり、厚さは1.5～2.4mmもある。牛革の可能性はある。
金具：銅製。残欠の銅片には緑青が出ている。

函装27 中段2片 銭形

[調査の結果]

銭形・濃紫色 線維の癒着が顕著で、硬い。濃紫色だが染料の色のように、漆の影響ではない、との意見があった。しかし、顕微鏡写真で見ると、漆の影響が出て皮革が紫のような色から茶色になっていることが判明した。すなわち、漆面は、紫の片面染めの上に漆を乗せて作られたのではないかと考えられる。革の線維や残毛の状況から牛革と判断される。

銭形・黄土色 線維の分離が良好で、弱いながらも弾力がある。隙間用の詰め物である。鹿革と見られる。

別の残片・帖角 漆膜があり、革は茶色化している。線維は癒着し、硬化・劣化している。顕微鏡写真によって線維が太く、絡みの多いことが認められ、牛革もしくは馬革であると見られる。

箒の把手の巻革

『資料』には「把手の紫染革の巻飾りに一は金糸、一はガラス玉を暈縷うんげんに連ねたものを用い、作りが僅かに異なる二本が一对として伝めどぎのほうきわっている。目利箒の名称は、かつてこの箒の材料と考えられていたメド(キ)ハギ(薯蕷)に由来するとみられるが、実際には、キク科に属するコウヤボウキの茎を束ねて作ったものである。枝のところどころには黄、緑、褐色のガラス玉が挿入まれ、玉箒の名にふさわしい。」と書かれている。

子日目利箒〈ねのひのめとぎのほうき〉第1号

資料：長65.0 把径3.9 コウヤボウキの茎
紫革 金糸 ガラス玉(濃緑)

[調査の結果]

短い紐状の物：把革の箒部側に紙または革のような紐が付いている。会符の残欠であるかもしれない。顕微鏡写真で、かなり長い繊維が平面的に交差していることから和紙であると判断した。

把(柄)部：柄には鹿の紫革が巻かれており、その上に巻きつけた糸により紫革にはしわが生じている。この窪み部分の表面はほとんど擦れておらず、当初の革の特徴が観察できる可能性がある。「2本の麻を撚った細い紐を巻き、その上にかわに膠などを塗り、金箔をおいたものであろう」との見解が示されたが、ほとんどの金箔

は剥落している。

鹿紫革：黒っぽい染みが広がっている。原因は判然としない。外観からも未鞣革とは思えず、芯まで染料が入っている。燻し紫染革と推察される。革はかなり使い込まれたような印象を受ける。革の表面には凹凸があって、その突出部・膨らみ部は褪色が激しい。擦れて剥げたようである。虫穴も多い。



日目利箒 第1号及び第2号

箒部：コウヤボウキの茎には小さな虫穴が無数に見られる。箒の構造上、鹿革の顕微鏡写真の撮影は困難であった。

子日目利箒〈ねのひのめとぎのほうき〉第2号

[調査の結果]

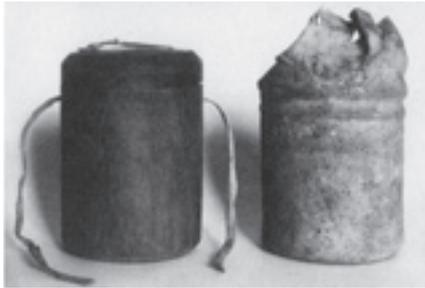
箒部：茎にも虫穴が多数開いている。枝には青い飾り玉が残っている。

把部：把部には鹿の紫革を巻く。その上に玉を通した細い紐が一本巻かれて残っており、その他の部分にも玉を連ねた紐を規則正しく巻いた15段の痕が残っている。

紫革：把部の紫革は、把の断面側から見ると、巻き込まれた革の約7割が重なっている。下方に一部分、革には巻きずれによるはみ出しがある。革の上辺部には虫食い跡があり、革の中心層は白く見えることから表面だけの染めと見られる。また、顕微鏡では線維の先端が縮れているのが観察されたので、燻し革と判断した。なお、虫食い発生の一つの原因として、糊付け加工時の糊の存在が考えられる。

桐合子〈きりのごうす〉其14

『資料』では「桐を剥って作った合子。蓋上面および身側面に二箇所ずつ孔を穿ち、そこに鹿鞣革製の紐を通して蓋と身を連結する。内面には円形白氈製の底敷を敷く。鹿鞣革で作った袋がつく。」とされ、用途等については書かれていない。



桐合子 其14 (右が革袋)

資料：径11.4 高16.0 桐 紐・外袋は鹿鞣革 白氈 [はくせん] の底敷

[調査の結果]

外袋：しみがかなり散見される。上方には形・位置ともに不規則な穴が開けてあり、この穴に革紐が通される。穴は摘み切りのような開け方である。上方の革の形状も不規則で、桐合子を入れるために急いで製作したような、雑な作りである。袋の上部は薄くて、部分的に皮下組織も見られたことから、腹部にかかる部位から裁断したものであろう。革は極めて柔軟で、鹿の鞣し革と見られる。燻し革かどうかは判定が難しいが、燻し革と見るべきであろう。表面に黒っぽい斑点が見られるが、何か他の器物のしみが付着したようにも見える。厚さは0.9mm、革の円周は36.8cm、革の高さは約22cmである。
革紐：革紐は柔軟で、厚さは1.1mm。虫食いも見られるが、燻し鹿革と見られる。
桐の合子：蓋の角の丸みはかなり雑な作りである。

方形天蓋

『資料』では「大きさ、意匠、構造などさまざまな九張分が残る。屋蓋は方形とし、側面が付くものと付かないもの、またその軒下に垂飾が付くものと付かないものがある。屋蓋中央には中倉196灌頂天蓋骨および天蓋骨に見られるような骨かんじょうてんがいのほね（方形天蓋を張るための骨をいう）を通すための孔を開け、四隅に腕木を止める乳（腕木の先端に取り付けられる革製の袋状のもの）が付く。完成品がなく、いずれも形態や使用法は推測の域を出ない。」と述べている。

天蓋乳 箱装32-4

資料：紫色の乳 長6.7 厚さ0.14

白色の乳 長5.4 厚さ0.14

天蓋は仏殿を飾る荘厳具で、綿や綾の織物を木製の骨に掛け、その骨を留める乳と呼ばれるサックを革で作し、四隅に付く。



天蓋乳 (函装32-4)

[調査の結果]

調査対象は天蓋本体から外れた乳2種。紫色のものは鹿革である。柔軟で、外側の紫色は鮮明だが、内側は色が浅めで、断面は白い。袋状部分では、内側への曲げによる大きいしわが内側表面に何本か走っている。毛羽は短い。この紫革では、革の劣化はほとんど感じられない。鹿の燻し革であろう。

白色のものも鹿革である。外の毛羽は長く、内側も比較的線維が長めで、紫革より雑な造りに見える。やや硬めである。